

誕生にかけられた願い

「いのちを大切に」のむずかしさ

私は、滋賀県の田舎に生まれ、公立の幼稚園・小学校に通いましたので、特別に学校で宗教教育を受けたという記憶はありません。しかし、お寺に生まれ、祖父が熱心な住職だったため、ちょうど幼稚園の頃は祖父の傍で、宗教的な雰囲気の中から育ちました。そのような経験から言いますと、保育園や幼稚園での三歳から六歳までのお子さんの宗教的な経験は、非常に大事だなということを感じております。最近では、この経験が将来、大人になってからも本当の財産になるのではないかなと思うようになりました。

私自身、現在子育ての真っ最中で、保育専門の先生方に何か言えるような立場ではありません。ですから保育に限らず、私の経験しましたことを中心に最近のいろいろな事例をお話しするなかで、みなさんの参考にしていただければと思います。

今日の総合的なテーマとして「見守るこころ、寄り添うこころ」というタイトルをつけましたが、このことをいくつかの細かいテーマに分けて話をさせていただきたいと思います。まず『いのちを大切に』のむずかしさ”ということについて、お話をします。

最近、残念なことですが、少年による殺人事件が多発しています。また、数限りなくいろいろな問題が噴出しています。そんな時、マスコミなどで必ず取り上げられるのが「いのちを大切に」や「いのちの教育」というテーマです。しかし、そのように言うことは簡単ですが、もし大人が子どもに「いのちを大切に」ということを教えるのであれば、「いのちを大切に」とはどういうことなのかということ、大人自身がわかっていなければなりません。しかし、そのように言っている大人たちが、本当に「いのちを大切に」ということや「いのちの教育」とい